



Title	ヘッセと深層心理学
Author(s)	小澤, 幸夫
Citation	独語独文学科研究年報, 9, 33-43
Issue Date	1983-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25625
Type	departmental bulletin paper
File Information	9_P33-43.pdf



ヘッセと深層心理学

小澤幸夫

1. ヘッセと深層心理学の出会い

ヘッセは早くから無意識の世界に興味を持っていました。出版された小説としては処女作である1901年発刊の〈Hermann Lauscher〉でも、すでに無意識と意識の問題を扱っており、芸術を生み出すものとして夢の世界を重視しています。また〈die ganze untere Welt in mir〉¹⁾「私の心の中の下部の世界全体」という明らかに無意識の世界を暗示する表現も見られます。

しかし、ヘッセが本当に深層心理学に親しむようになったのは第一次大戦中でした。父の死、妻の精神状態の悪化そして入院、三男マルティンの病気と身辺に不幸が続き、また〈Neue Zürcher Zeitung〉に〈O Freunde, nicht diese Töne!〉(1914. 11. 3)を発表し、平和を訴えたために、かえって多くのドイツ人の反感を買い、「反逆者」「裏切り者」とののしられ、極度のノイローゼに陥りました。

そのころの様子を、彼は〈Kurzgefaßter Lebenslauf〉(1924)の中で次のように述べています。

「1914年の夏が来た。突然、内も外もまったく変化したように見えた。われわれの今までの無事な生活が不安定な地盤に立っていたことがわかった。それで今や、逆境が、大きな教育が始まった。いわゆる大いなる時代が始まった。(中略)

その当時、わたしを他の人々から区別したのは、多くの他の人の持っていたある大きな慰め、すなわち感激をわたしが持っていなかったことだけであった。それによってわたしは再び自分自身にかえり、外界と衝突するにいたった。(中略)

しかし今度は内省が行なわれずにはいなかった。いくばくもなくわたしは、自分の苦しみの責任を自分の外部にではなく、自分の内部に求めるように強いられているのを知った。なぜなら、全世界の狂気と粗暴さを非難する権利は、人間にも神にもなく、ましてやわたしにはないことを悟ったからである。わたしがこのように世の成り行きと衝突したとしたら、わたし自身の中にあるいろいろな混乱があるにちがいがなかった。実際、大きな混乱があった。²⁾」

このようにして、ヘッセはこの混乱を凝視するために、Freud, Jung, Bleuler, Stekelなどの書物に親しむようになり、またユングの弟子Joseph Bernhard Langの分析を受けるよう

になります。1916年5月から1917年11月まで、二人の対話は60回にもなりました。精神分析療法は対話から成り立っているのです。ラング博士は、〈Demian〉に登場するオルガニストPistoriusのモデルだとHugo Ballは指摘しています。³⁾Pistoriusとラングの関係はまた後で述べることにして、ここでヘッセ自身が深層心理学についてまとめた形で述べている見解を、〈Künstler und Psychoanalyse〉から引用してみましょう。

「フロイトの『精神分析』が精神科医という狭い範囲をこえて多くの人の関心を引き、フロイトの弟子ユングが無意識の心理学と、タイプ論を作り上げ、一部公表してから、分析心理学が直接、民族神話、伝説、文学に目を向けてから、芸術と精神分析の間に、緊密な、実り多い接触が生じてきました。(中略)

特に、芸術家がこの新しい、いろいろと実り多い観察方法に親しむことが期待されました。(中略)

私自身、この比較的新しい科学的な心理学に少なからぬ関心を持っていましたが、フロイト、ユング、シュテーケルらの著作の中で、新しいこと、重要なことが言われているのを読みました。総じていえば、彼らの心の事象に関する解釈の中で、私が詩作や自分自身の観察から得た予感のほとんどすべてが確認されているのを知りました。予感や一時的な思いつき、ぼんやりした知識として部分的にはすでに自分のものとなっていたものが、言明され、定式化されているのを見たのです。(中略)

さらにもう一つ鍵ができました。— 絶対有効という魔法の鍵ではありませんが、価値ある新しい立場、新しいすばらしい道具であり、その有用性と信頼度はすぐに証明されました。⁴⁾

これに引き続いて、ヘッセは芸術家に精神分析があたえる三つの確認を挙げています。

「まず第一は、空想、虚構(Fiktion)の価値の確認です。芸術家が自分自身を分析するならば次のことを隠すことができなくなります。つまりそれは、彼が悩んでいる弱点の一つが、自分の職業に対する不信、空想の価値に対する疑念であり、市民的観念や教育を正しいとし、自分のいっさいの行為を単に美しい虚構にすぎないものと片付けようとする他人の声を自らの内に感じることです。しかし精神分析は、彼が時折『単なる』虚構としてしか評価できないものが、まさに非常に高い価値を持つものであることを、はっきり教えてくれるのです。そして、彼に精神的な根元的要請が存在することや、あらゆる権威的な尺度や価値判断が相対的なものであることを思い出させてくれるのです。つまり分析は芸術家に自らを保証してくれるのです。⁵⁾

以上が一番目です。続いてヘッセは次のように述べています。

「精神分析の道を、すなわち、精神の根元を記憶、夢、連想から探求することを真剣にさらにもう一步つっこむ者は、永遠の収穫として『自己の無意識に対するより密接な関係』とも呼べるものを得ます。つまり、より熱心な、より実り多い、より情熱的な、意識的なものと無意識的なもの

の間の往復を体験するのです。

そしてこれがまた、倫理的なもの、個人の良心に対する精神分析の成果と結びつくのです。つまり分析は、自分自身に対する真実、我々がなじんでいない真実を要求します。我々が極めて上手に心の中で抑圧していたものを見、認識し、探求し、真剣と受けとめることを教えてくれるのです。(中略)

この教育し、促進し、鼓舞する分析の力を芸術家ほど創造的に感じる者はありません。というのは、彼にとって重要なのは、世間とその道徳にできるだけ安直に迎合することではなく、彼自身が意味している一回的な存在だからです。⁶⁾

こうしてヘッセは精神分析を新たな手がかりとして、内面への道を探求しつづけることとなります。

この文章が1918年の7月16日のFrankfurter Zeitungに掲載されたのを読んだ Freud は次のような感謝状をヘッセに送っています。

「ペーター・カーメント以来、あなたの作品を楽しく読ませていただいている一読者として、あなたがフランクフルト新聞に書かれた記事『芸術家と精神分析』に感謝し、あなたに握手させていただきます。」(1918. 8. 28)⁷⁾

一方、ユングとの交流は遅くとも1919年には始まっていたと考えられます。というのは、Emil Sinclair という匿名で出た〈Demian〉がヘッセの作品であることを見ぬいたユングは、1919年12月3日、次のような手紙をヘッセに送っているからです。

「あなたの素晴らしく、真実に満ちた本、『デミアン』に対して心からお礼申し上げます。私がおここにあなたの匿名をあばくことは、まことに無礼でしゃばりのことですが、この本を読んだときに、私はこれはルツェルンあたりから来たのに違いないと感じたのです。⁸⁾

ルツェルンは当時ラング博士が住んでいた所です。

1921年には、ヘッセは今度は直接ユングの分析を受けています。

ところでヘッセは「芸術家と精神分析」の中で、ユングをフロイトの弟子としていますが、実際には、フロイトは、フランスでシャルコー、ベルネームについて学び、ユングはスイスのブルクヘルツリ病院でブロイラーの助手として働いていたのでした。二人は全く独自に患者の治療をしていくうちに、無意識の世界につきあつたのです。ユングは、自分の学問をフロイトの「精神分析」〈Psychoanalyse〉と区別して、「分析心理学」〈analytische Psychologie〉と呼んでいます。そして無意識を取り扱う心理学を一般に、アードラーの個人心理なども含めて「深層心理学」と呼んでいるのです。

2. <Demian>の分析

さて、それではこれから、深層心理学の影響がいかにヘッセの作品に及んでいるかを、作品に即して見てみましょう。

心の成長のパターン、ユングの言葉でいえば — 個性化の過程 — を扱ったヘッセの代表作に <Demian> があります。これには、深層心理学の影響が色濃く見られます。まずこの作品の核をなしている序文を見ましょう。

「私はさがし求める者であった。いまでもそうである。しかし私はもはや星の上や書物の中をさがし求めはしない。私の血が体内を流れつつ語っている教えを、私は聞きはじめる。私の物語は快い感じを与えはしない。それは、考え出された物語のように、甘くも、なごやかでもない。それは不合理と混乱、狂気と夢の味がする、自己を欺こうとしない、すべての人間の生活のように。

すべての人間の生活は、自分自身への道であり、一つの道の試みであり、一つのささやかな道の暗示である。どんな人もかつて完全に自分自身ではなかった。しかし、めいめい自分自身になろうと努めている。ある人はもうろうと、ある人はより明るく。めいめい力に応じて。だれでも皆、自分の誕生の残りかすを、原始状態の粘液と卵の殻を最後まで背負っている。ついに人間にならず、カエルやトカゲやアリにとどまるものも少なくない。上のほうは人間で、下のほうは魚であるようなものも少なくない。しかし、各人みな、人間に向かっての自然の一投である。われわれのすべてのものの出所、すなわち母は共通である。われわれはみんなおなじ深淵から出ているのだ。しかし、みんな、その深みからの一つの試みとして、一投として、自己の目標に向かって努力している。われわれはたがいに理解することはできる。しかし、めいめいは自分自身しか解き明かすことができない。」¹⁾

ここにはヘッセ文学の主題ともいえるべき自己実現のテーマがはっきり示されています。

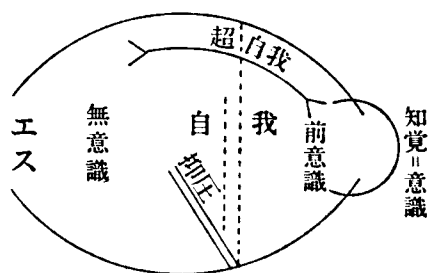
自己実現とはなにか、次にそれを作品を追いながら見ていきましょう。

「デミアン」は、二つの世界 — 「明るい世界」と「暗い世界」の対立から始まります。

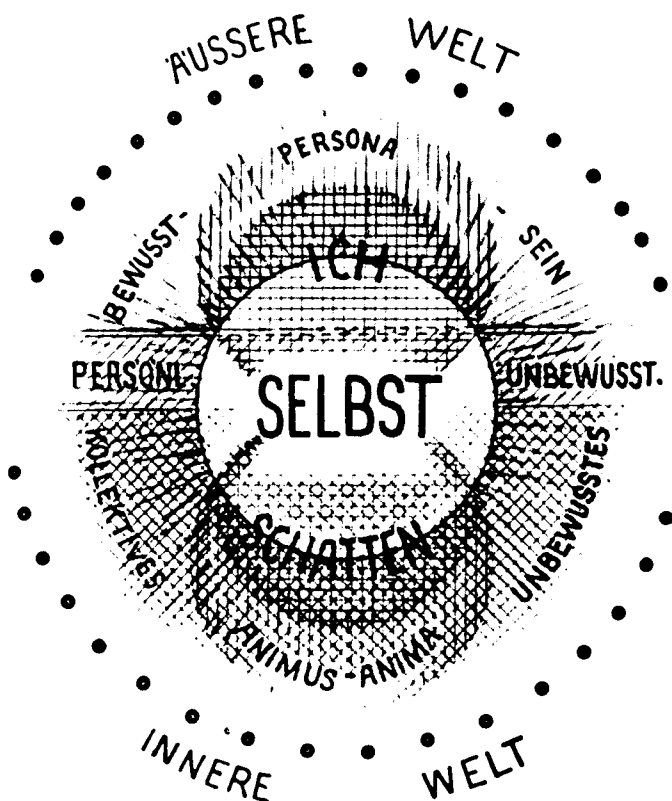
良家の息子であるシンクレアは、父母の住む明るい世界 — 敬虔で清らかな世界 — と女中や職人たちの暗い世界 — 強盗や殺人などのある世界 — があることに幼いころから気づいています。フロイト風に解釈するなら超自我（これについてはフロイト自身「良心」と小さな声で言い換えてもいいと言っています）²⁾とエス（イド）との対立が図式化されています。（図I参照）

この間あってシンクレア、すなわち「自我」は、エスに追いまкруれ、超自我に締め上げられ、激しく揺れ動くのです。この対立する二つのものをどのように自分の中に統合させるかそれがこれからの課題となります。

〔 図 I 〕



〔 図 II 〕



心の総体

ÄUSSERE WELT = 外的世界

PERSONA = ペルソナ

ICH = 自我

BEWUSSTSEIN = 意識

SELBST = 我

PERSÖNL. UNBEWUSST. = 個人的無意識

SCHATTEN = 影

KOLLEKTIVES UNBEWUSSTES = 集合的無意識

ANIMUS-ANIMA = アニムス-アニマ

INNERE WELT = 内的世界

シンクレーアは、リンゴを盗んだという嘘がもとで、悪者の少年クローマーにおびやかされることとなります。

「私は彼からのがれられなかった。ときとして数日間彼に悩まされないことはあっても、私はやはり彼に縛りつけられていた。彼は私の影のように私の夢の中にいっしょに生きていた。」³⁾

実際、クローマーは、シンクレーアの影だったのです。ユングによれば、個性化の過程で最初に登場してくるのがこの影です。図Ⅱをご覧下さい。⁴⁾

集合的無意識の中に影がありますね。集合的無意識とは、非個人的で、ある集団に共通しているもので、けっして意識することのできないものです。影とは自分の生きてこなかった半面——いわば黒い分身——自分の人格の中の隠れた、抑圧された、認めたくない側面なのです。たとえば、友達が、我々を責めた場合、怒りがこみ上げてくるのは、我々の意識していない自分の影の一部を見いだすことになるからです。自分の影を他人に投影し、これを攻撃していたのではいつまでも解決は得られません。それを自分の中に認識してはじめて、克服することができるのです。ヘッセが先に引用した〈Kurzgefaßter Lebenslauf〉の中で、「自分の苦しみの責任を自分の外部にではなく、自分の内部に求めるよう強いられているのを知った。」⁵⁾と述べているのは、まさにこの影を認識したということに他なりません。

シンクレーアは、誰にもいえないこの悩みをデーミアンにうちあけます。デーミアンは読心術を心得ていました。彼は、聖書に出てくるカインのしるしの話をし、それは勇気を持った優れた人たちに与えられたしるしだといって、シンクレーアが従来知っていた解釈を否定します。皆と離れて、自分の道を歩くものは、誰でもカインのしるしを持っているのでした。そしてデーミアンもシンクレーアもカインのしるしを持っていたのです。この話のあとでシンクレーアは夢を見ます。

「いちばん恐ろしかったのは、私の父にたいする殺害の夢だった。それからさめた時、私はなけば、精神錯乱に陥っていた。その夢では、クローマーがナイフをとぎ、私の手に握らした。私たちは並木道の木の下に立って、だれかを待ち伏せていた。だれを待ち伏せているのか私は知らなかった。だが、だれかがやってきた。クローマーが私の腕を押して、刺し殺さねばならないのはあの男だと教えたとき、見れば、それは私の父だった。そこで私は目をさました。」⁶⁾

この夢は、明るい世界、超自我の世界と対し、暗い世界、エスの世界が自己の承認を迫っていることを示しています。そして、シンクレーアがこの暗い世界をも自我の中にとり入れた時、クローマーはもう近づかなくなっているのです。

個性化の過程の次の段階は、「アニマ」の登場です。アニマは男性の無意識の中にあるところの像 Seelenbild であり、女性の形となって現われるものです。シンクレーアの場合、ベアトリーチェがこれにあたります。

ある時、ギムナージウムの生徒になったシンクレーアは公園で美しい少女を見かけます。彼は彼

女にベアトリーチェという名をつけます。ダンテの「新生」からとった名です。彼はその頃目ざめてきた自分の性欲を、この女性に対する精神的な礼拝に変えようとし、絵を描きます。フロイトのことばでいえば昇華です。

「できあがった絵の前にすわると、ふしぎな印象を受けた。それは神々の像、あるいは神聖な面的一种のように思われた。なかば男性、なかば女性で、年というものがなく、夢想的であると同時に意志の強さを持ち、秘めた生気を持つと同時にこわばっていた。この顔はなにか私に言うことを持っていた。それは私に属し、私に要求を課していた。だれかに似ていたが、それがだれであるかはわからなかった。⁷⁾」

それはデーミアンの顔かと思えたのですが、結局、ベアトリーチェでもデーミアンでもなく、自分自身を描いたものだったということが分かるのでした。

このことを確認すると、その後シンクレーアはベアトリーチェに会っても感動を覚えなくなり、徐々に忘れていきます。つまり、彼はこのアニマを意識化することによって、自分の内にとり入れてしまったのです。

さて、次に登場する象徴は鳥です。シンクレーアは、デーミアンと出会った頃のことを思い出します。デーミアンはその頃シンクレーアの家紋の鳥をスケッチしていたことがありました。デーミアンと紋章がでてくる夢を見たシンクレーアは、鳥を描き、デーミアンに送ります。ふしぎな方法で届いた返事には次のような文句が書いてありました。

「鳥は卵の中からぬけ出ようと戦う。卵は世界だ。生まれようと欲するものは、一つの世界を破壊しなければならぬ。鳥は神に向って飛ぶ。神の名はアプラクサスという。⁸⁾」

この殻は、シンクレーアにとっては、幼年時代の世界であり、旧習にそまった社会です。またそれは、序文にあった「自分の誕生の残りかす」でもあります。この殻を破る手伝いをするのがオルガニストのピストーリウスです。

「私たちの対話が、まったく新しいもの、ぜんぜん意外なものをもたらすことはまれだった。しかし、その対話はすべてどんな平凡な対話でも、私の心中の同じ点をかすかながらたえずハンマーでたたいた。すべてが、私が皮を脱ぎ、卵の殻を破るのを手伝ってくれた。そのたびごとに私は頭をいくらかより高く自由に上げていった。ついには私の黄色い鳥はその美しい猛鳥の頭を、破壊された世界の殻の中から突き出した。

私たちはまた、たびたびたがいの夢を語りあった。ピストーリウスは夢に解釈を与えることを心得ていた。⁹⁾」

このピストーリウスのモデルは前にも述べたようにラング博士です。〈Demian〉が書かれた時にラング博士の書いた文を見てみましょう。

「あなたは気づいていませんが、私はあなたの中で仕事をしています。私の地下牢の上に重くの

しかかっている固い殻を打ち破って、あなたの魂の氷を貫こうとしているのです。」¹⁰⁾(1917. 10. 25)

「あなたは聴覚のざわめきの中で、私がハンマーで叩く音を聞きます。あなたの心臓の鼓動は、解放を求める私の手が叩くハンマーの音です。」¹¹⁾(1917. 10. 26)

内容のみでなく殻、ハンマーなど、個々の語に至るまで先に引用した<Demian>の本文とよく符合しています。

Ziolkowsky によれば、鳥のシンボルは、個人の精神的再生と宗教的探索、成長との双方を表すものなのです。つまり、この絶対的次元は、ユング心理学の集合的無意識の次元なのです。この卵の絵は、シンクレアの自由な創造によるものであり、記憶によるものではありませんでした。しかし、シンクレアが実際に卵を砕いて出てくる鳥を描き、そのことによって、彼の絵を古い崇拜のシンボルに結びつけたというまさにこの事実が、ユング心理学の集合的無意識のプロセスを例証するものです。¹²⁾

では鳥が目指すアブラクサスとはどんな神でしょう。それは「神であり、悪魔であり、明るい世界と暗い世界を内に蔵するものだ。」¹³⁾とピストーリウスはいますが、ユングは1916年に「死者への七つの語り」の中でアブラクサスについて次のように書いています。

「アブラクサスは知ることの難しい神である。その力は人間がそれを認めることができないので、最大である。人は太陽から最高の善を、悪魔からは最低の悪を経験するが、アブラクサスからはあらゆる点で不確定な『いのち』、善と悪との母なるもの、を経験する。……アブラクサスは太陽であると同時に、虚空の永遠の吸い込み口であり、非難するもの切断するもの、悪魔である。……アブラクサスは同一の言葉、同一の行為の中に、真と偽、善と悪、光と闇を産み出す。従って、アブラクサスは怒るべきである。」¹⁴⁾

つまりアブラクサスは善と悪の両極性を包含する存在なのです。

それはヘッセが<Die Brüder Karamasoff oder der Untergang Europas>(1919)で扱ったロシアの神デミウルクを思わせます。

もともとアブラクサスというのは、B. C. 2～4世紀のグノーシス派の一派バシリデス派が用いはじめた言葉で、これを刻んだ石をアブラクサス・ストーンというのだそうです。この語をギリシア字母で書くと365の数を表わすことから、至高の存在から出る靈的位階名とされたようです。ヘッセは、しかし、アブラクサスの概念についてはユングの書物から、あるいはラング博士から直接教わったと思われれます。ユングが<Demian>の著者をヘッセだと見破った理由は色々考えられますが、このアブラクサスの概念はその大きな鍵の一つだったでしょう。

さて最後に登場する重要な人物はエヴァ夫人です。エヴァ夫人はデーミアンの母です。

「それは私の夢像だった。夢像は彼女だった。息子に似ていて、ほとんど男のような大きな女の

姿。母らしい表情ときびしい表情と深い熱情をたたえていて、美しく誘惑的で、美しく近づきがたく、魔精と同時に母、運命と同時に愛人だった。それが彼女だった。¹⁵⁾」

エヴァというのは緋名です。そして、彼女はその名のとおり、万物の母を思わせます。彼女の中に、シンクレーアは、クローマー、デーミアン、ベアトリーチェ、鳥、アプラクサスといった一切のイメージを見るのです。彼女を愛していくうちにシンクレーアは、彼女もまた自己の内面の象徴に他ならないことを悟っていくのです。

「自分の本性が引きつけられて目ざす対象としているのは彼女その人ではなくて、彼女は私の内心の象徴であるにすぎず、私をひたすら深く私自身の内部に導こうとしているのだ。¹⁶⁾」

彼女もまたシンクレーアの内なる世界の導き手なのです。万物の母であるエヴァ夫人は、ユングの元型の一つ、太母を思わせます。太母とは『産み出すもの』であり、地母神のイメージとして全世界至るところに見られるものです。そして産み出すものとしての地母神が、また死の神としての特徴を持つことも多くの神話に共通に認められます。たとえば日本の神話では国土を産み出した母なる神、伊弉那美は、特に黄泉の国に下って死の神となるのです。土から生まれた植物が、また土にかえるように、すべてを生み出す深淵はすべてのものを呑みつくすものとしての意味も兼ねそなえているのです。このような深い意味を持った母なるもののイメージを、個人的な母親像と区別して、ユングは太母と呼んでいます。

しかし、エヴァ夫人は、単に、すべてのものの母であるだけでなく、現実の魅力的な女性です。それはアニメとしての要素もあわせもっています。ヘッセ自身、なかなか母親から自己を解放することができませんでした。フロイトの言葉でいえば、エディプス・コンプレックスが強かったのです。それ故、ヘッセ文学の理想とする女性、ヘッセのアニメは、必ずといっていいほど母のイメージ母性的なるものへと重なってしまうのです。

さて、最後に、いったいデーミアンとは何者なのでしょう。シンクレーアが危機に頻した時、必ずデーミアンがやってきます。クローマーにおどされた時、学生時代酒びたりになっていた時、ピストーリウスの指導に限界を感じた時、そしてこの物語の最後、戦争で倒れた時もそうです。シンクレーアの元にやってきたデーミアンはいいます。

「シンクレーア、よく聞きたまえ。ぼくは去らなければならないだろう。きみはおそらくいつかぼくを必要とすることがあるだろう。クローマーにたいして、あるいはほかのものにたいして。そのとき、きみがぼくを呼んでも、ぼくはもうむぞうさに馬や汽車でかけつけはしない。そのとききみは自分の心の中を聞かなければならない。そしてぼくがきみの中にいることに気づくよ。¹⁷⁾」

そして、この小説の最後は次のように終わります。

「自分の心の中に一暗い鏡に運命のいろいろな姿のまどろんでいる心の中に一深く下がっていく

とき、私はただ黒い鏡の上にかがみさえすればよい。そうすれば、自分自身の姿が—いまはまったく彼に、私の友であり導き手である彼に似ている自分自身の姿が、見えてくるのである。¹⁸⁾」

そうです。デーミアン¹⁸⁾はシンクレーアが長い間探し求めていた自分自身の真の姿なのです。先に挙げた図を御覧下さい。Ich（自我）これは、意識の中心です。これに対して、Selbst（自己と普通訳されています。）は、意識と無意識をあわせた心の全体の中心です。IchからSelbstへの過程、これが自己実現の道なのです。シンクレーアはいわばIchなのであり、そのSelbstがデーミアンなのです。この道は一生かかっても辿れるか辿れないかの困難な道です。そしてヘッセはこれをデーミアンの中で自己分析に基づいて、忠実に描いたのでした。ここで最後にもう一度、デーミアンのモットーを思い出しておきましょう。

「私は、自分の中からひとりてに出てこようとしたものを生きてみようとしたにすぎない。なぜそれがそんなに困難だったのか。¹⁹⁾」

文 献

1. ヘッセの著作

Hermann Hesse (=H. H.) : Gesammelte Werke in 12 Bänden, Suhrkamp Verlag, Frankfurt a. M. 1970. (=GW)

2. 参考文献

Hugo Ball : H. H. Suhrkamp Verlag, 1972. (=Ball)

H. H. Sein Leben in Bildern und Texten, Hrsg. Volker Michels, Suhrkamp Verlag, 1979. (=Michels)

Theodore Ziolkowsky : The Novels of H. H. Princeton University Press, Princeton, 1974. (=Ziolkowsky)

高橋健二「ヘルマン・ヘッセ — 危機の詩人」新潮社、1974.

フロイト「精神分析入門」上、下。高橋義孝他訳、新潮社、1977. (=フロイト)

J. ヤコービ「ユング心理学」池田絃一他訳、日本教文社、1973. (=ヤコービ)

河合隼雄「ユングの生涯」第三文明社、1978 (=河合)

註

1

1. GW 1, S. 333.

2. GW 6, S. 399ff. 訳は高橋健二氏(角川文庫1969)によった。
3. Ball, S. 142.
4. GW 10, S. 47f.
5. Ebenda, S. 50.
6. Ebenda, S. 50ff.
7. Michels, S. 162.
8. Ebenda, S. 163.

2

1. GW 5, S. 8. 訳は高橋健二氏(新潮文庫, 1972)によった。以下<Demian>からの引用はすべて同書の訳を用いるが、一部筆者の手を加えた所がある。
2. フロイト、下、S. 298にこの図が掲載されている。
3. GW 5, S. 35.
4. ヤコービ、S. 224とS. 225の間に第19図としてこの図が挿入されている。
5. GW 6, S. 400.
6. GW 5, S. 35f.
7. Ebenda, S. 82.
8. Ebenda, S. 91.
9. Ebenda, S. 106.
10. Ball, S. 143.
11. Ebenda.
12. Ziolkowsky, S. 116.
13. GW 5, S. 109.
14. 河合, S. 112.
15. GW 5, S. 129f.
16. Ebenda, S. 148.
17. Ebenda, S. 162.
18. Ebenda, S. 163.
19. Ebenda, S. 7.

付記 本稿は昭和56年12月、北海道大学文学部で行なわれた「北海道ドイツ文学会」での口頭発表の草稿に加筆訂正をしたものである。

(大学院博士課程)